

山梨県の中山間地における ホームガーデンの自家採種栽培と在来品種の保存

大崎久美子（東京学芸大学環境教育研究センター）

The in-house seed production and conservation of local varieties
in home gardens on the hillside in Yamanashi prefecture

Kumiko OSAKI, FISFEE, Tokyo Gakugei University

1. はじめに

現在、世界的に見て、商品作物は、コムギ・イネ・オオムギ・トウモロコシなどの主要穀物、ジャガイモなどのイモ類、ダイズなどのマメ類の少数の特定改良品種が、広大な面積に栽培されている。自家用作物においても、種苗会社の製造した一代雑種の種子を毎年購入して栽培する耕作者が多い。一方、主に自給を目的とした小規模耕作地であるホームガーデンでは、自家採種により在来品種を守り育てている人々も少なからずいる。

2008年の8月から2010年までの約3年間、山梨県の中山間地である小菅村と、上野原市の西原地区、^{さいはら} 桐原地区^{ゆずりはら}において、3地区の計18戸に対し、四季折々、継続した聞き取りや耕作地の实地踏査、参与観察を行った。

本稿では自家採種栽培の現状と耕作者らの在来品種保存についての意識について述べる。

2. 自家採種の現状と自家採種される作物

調査地の3地区の計18名の耕作者全員が、自家採種による栽培を行っていた。栽培作物は、重複総計900品種。1世帯平均50品種。全栽培作物数のうち、自家採種作物数の割合は42.8%

(385/900)である。

地域別にみると、小菅村における自家採種率は37.8%、西原地区は47.9%、桐原地区は42.4%であった。耕作者別の自家採種率の範囲は17.7~69.6%であった。調査地で自家採種される作物は以下の通りである(表1)。

- 1) イモ類:コンニャク、サトイモ(ヤツガシラ、トウノイモ)、ジャガイモ、ナガイモ、サツマイモ。全イモ類品種における耕作者個別の自家採種率の範囲は37.6~85.7%であった。
- 2) 豆類:ダイズ、アズキ、インゲン。全豆類品種における耕作者個別の自家採種率の範囲は0~100%であった。
- 3) 穀類:オオムギ、コムギ、ソバ、アワ、キビ、ヒエ、シコクビエ、モロコシ、トウモロコシ。全穀類品種における耕作者個別の自家採種率の範囲は0~100%であった。
- 4) 在来品種または固定品種の野菜類:ネギ、ハウレンソウ、キュウリ、フユナ、ノラボウ。
- 5) それ以外の野菜類:カボチャ、コマツナ、カブ、キャベツ、オクラ、モロヘイヤ、ツルレイシ、センナリ、ユウガオ、トウガラシ、シヨウガ、ミヨウガ、エゴマ。全野菜類品種における耕作者個別の自家採種率の範囲は0

表1 作物分類別・地区別の自家採種率状況

地域	イモ類(%)	豆類(%)	穀類(%)	野菜類(%)	全作物(%)
小菅村	55.3	58.6	68.4	21.4	37.8
西原	66.6	74.0	86.5	25.5	47.9
桐原	62.7	65.8	64.7	28.1	42.4
全地域	61.8	65.8	76.7	24.8	42.8

～39.3%であった。

- 6) キノコ類：シイタケ、マイタケ。
- 7) 山野から移植栽培また自然に庭に毎年出現する植物で栽培するもの：ウド、タラ、フキ。

3. 自家採種の理由と方法

一つ一つの作物についての聞き取り調査によると、自家採種による栽培の理由は次の通り、大きく9つに分類される。

- 1) 食味・風味・食感がいい。独特である。美味しい。柔らかい、または締まっている。香ばしい、など。ホウレンソウ、コンニャク、サトイモ（ヤツガシラ）、ジャガイモ、インゲン、トウモロコシ（甲州モロコシ）、ソバ、キュウリ（半白キュウリ）、フユナ。
- 2) 地域外の家族、親戚にあげたい。コンニャク、ダイズ(味噌)、野菜類。
- 3) 特定の料理に使用する、特定の加工をする。コンニャク、サトイモ（ヤツガシラ）、ジャガイモ、ダイズ、アズキ、ネギ、トウモロコシ（甲州モロコシ）。
- 4) 調理しやすい。皮むきが楽、煮崩れない。サトイモ(トウノイモ)、ジャガイモ(ネガタ)。
- 5) 形がいい、大きい、品質がいい。サトイモ、コンニャク。
- 6) 収量が安定している。サトイモ、ダイズ、

アズキ。

- 7) 保存がきく。ジャガイモ(ネガタ、赤セイダ)。
- 8) ずっとそこにある。昔から作り続けている。代々受け継いでいる。(コンニャク、サトイモ、ダイズ、フユナ)。
- 9) 販売するため。(ソバ、コンニャク)。

自由回答の聞き取り調査に加え、自家採種の理由について選択肢を示した質問紙を使って尋ねてみた。複数選択可での回答結果は、図2の通りである。

一番多かった理由は、18人中17人があげた「その品種がおいしいから」であった。次いで「市販にないから」「伝承したい品種だから」が15人で続く。「地域に伝わる品種だから」、「その品種が特定の料理に必要なだから」、「病害虫に強いから」がそれぞれ11人。「種子代がかからないから」が10人。「採種しやすいから」「その品種の収量が安定しているから」「その品種を家族が好きだから」が9人。「楽しいから」が8人。「その品種の収量が多いから」という理由は6人で、収量を重視するなら一代雑種の種子を購入する方が有利であり、自家採種は手間もかかるし収量も必ずしも多くないのにあえて行っている理由について考えるのは重要なことだとわかる。「その品種が年中行事・祭に必要なだから」

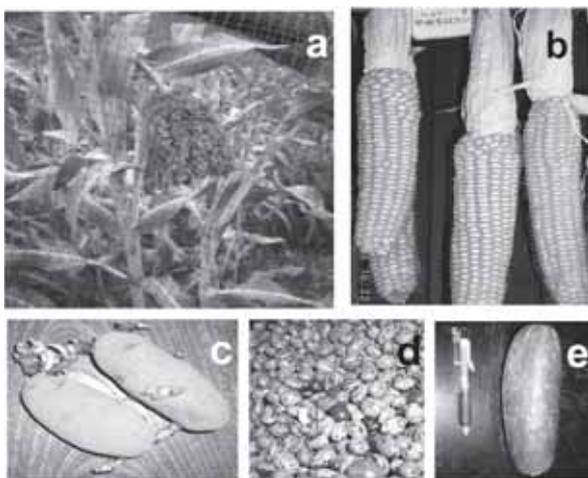


図1 代表的な在来品種 a; モロコシ (タカキビ)、b; トウモロコシ (甲州系ムカシモロコシ)、c; ジャガイモ (アカセイダ)、d; インゲンマメ (ヒョット) e; キュウリ (半白キュウリ)

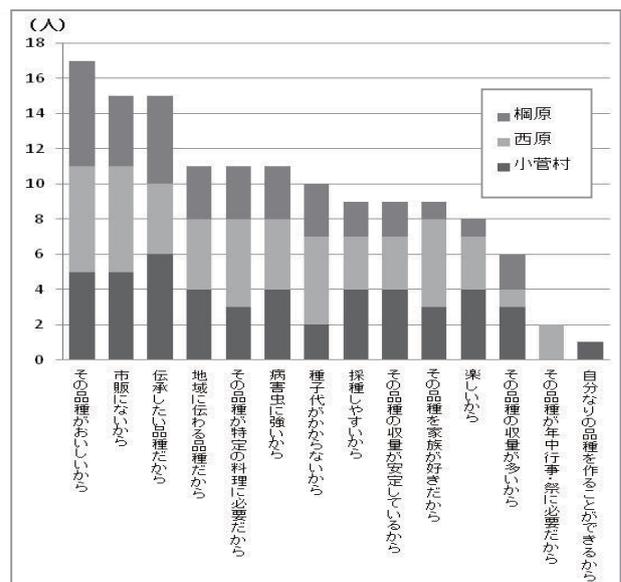


図2 自家採取する理由

ら」という理由を挙げた人がほとんどないのは、買った種子でも代用できるし、年中行事そのものが昔に比べ衰退しているということでもある。「自分なりの品種を作ることができるから」のように趣味的に品種改良を試みる人は1人のみであった。

自由記述では「その土地にあってから」という理由が3人からあげられた。桐原のMはこう話す。「土地に合った種子を使えば強い。外国から買った種子や木は虫がついたりする。そこに慣れた種子が一番いい。新しく買ったものは、初めはいいが病気になったりする」。また、「採種しておけば、重宝だから。人にあげたりもできる（例えばアズキ）」(桐原Q)。「種子を残しておきたい。年寄りで欲しいと言う人もいる（例えばヤツガシラ）」(桐原R)のように、種子を必要とする人が近所にいたら分けてあげるといふ助け合いの意識も強いいため、種子は大切に採集し保存しておくというのが当たり前の風習として身に付いているとみられる。

4. 生物多様性を維持する植物体の交換

Coomes and Ban (2004) は、ホームガーデンにおいては「植物体の交換は作物種の多様性の発展と維持のためのキーファクターである」と述べている。本調査地においても、多くの耕作者は、自分の必要な品種の種子や苗を手に入れるために、他者と交換したり、譲渡したりされたりという状況が日常的に行われていた。これによると、

- ・全耕作者が作物の種子（タネ）や苗、イモなどを他者に譲渡し交換し合っていた。
- ・譲渡し合う作物は、サトイモ13人、トオノイモ9人、ダイズ9人、ジャガイモ8人、ヤツガシラ5人、トウモロコシ5人、インゲン4人、ホモロコシ（タカキビ）4人、コムギ4人、キュウリ4人、ソバ4人、ノラボウ3人、キビ3人、アズキ、ハウレンソウ、トウガラシ等。
- ・交換または譲渡する相手は、近所の人、親戚、仕事の仲間、精米所の経営者など。
- ・譲渡の理由は、売ってないから、美味しい品

種と聞いたから、めずらしいから等。

- ・交換の理由は、ときどき種を変えた方が美味しいから、収量が上がるから等 である。

地区別で見ると、交換または譲渡する品種数で最も多いのは西原39、桐原29、小菅村27で、西原地区が突出していた。譲渡・交換相手はほとんど西原地区内の親戚か近所の人が多く、いかに西原の人間関係の結びつきが強いかわかる。サトイモについては西原地区内で全員が譲渡・交換していた。

サトイモの交換について西原のU氏は言う。「長い間には品種を替えなきゃ、だんだんできが悪くなる。5年そこいらはいいけど。よそからもらって最初は大きいイモだけど、だんだん小さくなる。毎年作っているので在来品種になってしまった。近所や知り合い、小菅村には妹がいて、そこからもってきたこともあった。」

同じ地域内であっても、少し離れた耕作地（例えば道路を挟んだ向かい側）と交換するだけで収量が上がるという。

耕作者らの環境認識の聞き取りにおいては、現在は昔よりも地域の結びつきが弱まったことや人口減少を憂い、人口増加と、再び昔のような地域内での温かい結びつきが強まることを願っている。しかし、都会に比べれば現在もなお、調査地の地域内の人間関係の結びつき、また親戚同士の結びつきは、とても強い。そしてこのことが種苗の交換が頻繁になされる背景にあるのである。

小菅村のH氏は村内に約20世帯の親戚、北に隣接する丹波山村に4世帯、山梨県外に15～20世帯の親戚がいる。西原のU氏の場合は、同じ西原地区内には70～80世帯の親戚、小菅村に2世帯、桐原地区に1世帯、上野原市内に1世帯、県外に3世帯の親戚があるという。遠い親戚と実際に会うのは年に2～3回だが、電話などで頻繁に連絡は取り合うそうだ。

同じく西原のJ氏は、西原地区内に150世帯、小菅村に10世帯、桐原地区に20世帯、他の山梨県内に20世帯、県外に17世帯の親戚がいる。J氏の家には、お盆や正月、お祭りの時期には遠くからの親戚が集まり、さながら民宿のよう

な状態になるという。客はここでしか食べられないものを食べたくて訪れるので、J氏の妻は1週間も前からたくさんのコンニャクを作って準備するという。また、ほとんどの耕作者が、旬の作物や手作りコンニャク、味噌、梅干しなどを、宅配便等で大量に親戚へ送っている。

また調査地では、昼間はほとんど家が鍵をかけず、お互いに声を掛け合い、気軽に訪れてはお茶や食事を共にする、という光景が日常茶飯事である。自家用で余った農産物は物産館に出荷することもあるが、隣近所や世話になった人にあげてしまう、という人が多い。

このように近所との結びつきも親戚同様に強く、どこの誰が、今年はどうな作物を作って、豊作だったのか不作だったのか、その品種は美味しかったのか、見た目はどんなだったのか、あるいは体調が悪かったので、今年はこの作物は作ってないようだ、といった情報が知人や親戚のネットワークを通じてやり取りされる。

情報交換は、耕作中やその後の休憩時間などに行われる。ホームガーデンは、生産の場であると同時に人々の交流の場でもある。そうして知り得た情報をもとに、種苗の譲渡や交換を行っている。このようにしてホームガーデンにおける生物多様性は、濃密な人間関係を基盤とした種苗の交換によっても維持されているのである。

5. 在来品種を保存することについての耕作者の意識

最後に耕作者たち自身が、在来品種を保存することについてどう思うかの聞き取りの声を紹介する。

【小菅村】

- ・A：ダイズについては、先祖代々の種子が切れることは深くは考えない。交換した方が収量がいいから。できれば切らさないで、味がいいので大事にしたいのは、ジャガイモ（富士種）、雑穀、ソバ。
- ・B：美味しいものは保存していこう。お互いに保存心がある。キビは奥多摩、タカキビは終戦後に来た。地に合ったソバ、適地適作。

大事にしくちやいけない。

- ・C：これを絶やしたら、あとはできない。「一度タネ切ったらもうあとはない」。おいしいから分けてくれと言う人が増えてくる。小菅村→丹波→他所の人→甲府へと、人から人へ種子が拡がっていく。
- ・D：できたら続いて欲しい。ここ幾年かで種子を自分で採る人もいなくなるのでは。自分だけでも作り続ける。
- ・E：私が作らなくても好きな人が出て、絶えることなく細々と続いていく。若い時は関心なくとも、年とって暇がでてくると古いものにあこがれてふと興味を持つ。誰かがタネを採ってくれたら、よそへもあげる。ここはそういう結びつきのある地域。
- ・F：小さいうちからやっているから覚えた。種子は昔からの地のものは、土地に合っている。植えてみたい人もいる。

【西原】

- ・G：雑穀だけは作り続けても収量が落ちない。家でやっているから絶えないが、止めればなくなってしまうタネもある。交雑しないものは大学で管理するのもいいが、必要な人に分けてやれば絶えない。自分が（種子を）切らしても近所に作っている人がある。タネが切れて作らなくなれば、品種がなくなってしまう。種子の保存は大切なことだと思う。
- ・H：かなり特殊なものだから、他との差別化が図れる。わざわざ食べに来る人がいる。ジャガイモ（ネガタ）、フユナ、サトイモ等。大事なので、守っていききたい。
- ・I：少し採っとけば、3年位平気で作れる。うちで採ったやつなら心配ない。
- ・J：在来品種の種子は貴重、ありがたい、大事なこと。ジャガイモ（アカセイダ）は掘ってすぐよりも、置いておいて春食べた方が美味しいという生活の知恵もすごいこと。
- ・K：なるべくいいものを選んでタネを採る。欲しいと言ってくれる人がいると励みになって嬉しい。
- ・L：今は意味をあまり感じていないが、これ

から何十年もしたら大事に感じる時期が来るかもしれない。クローンや遺伝子組み換え作物がアメリカ等で作られているから。

【桐原】

- ・M：寒さに対抗してタネを保存するのが大変。コンニャク、サトイモ、サツマイモ等の採種を続けている。
- ・N：いいものを作り続けている。サトイモ、コムギなど。半白キュウリは皮が柔らかい。談合坂インターでよく売れる。
- ・O：特別に可愛がってない。自分がやめても昔からの人たちが作っている。在来品種は美味しくて、案外病気にかからない。
- ・P：半白キュウリはここ何年か、美味しい、香りがいいと言われるようになった。緑のキュウリ（一代雑種品種）は作ったことがない。自負があるから他のものは作りたくない。
- ・Q：昔から作っているエンドウを近所の人にもらって干しといたら捨てられた。若い人には大切さがわからない。昔からの品種は大事にしたい。
- ・R：在来品種の保存は大切なこと。毎年脱穀しないで、そのままのタネの形で残している。珍しいものだと、どこか知らない人からも問い合わせが来る。

以上記したように、先祖代々からの「タネを切らしてはいけない。」という言い伝えを受け継ぎ、本当に大切なものは手間がかかっても残していく、という高い志と自負を日常のこととして抱いている調査地の人々に、私は深い尊敬の念を抱かずにはおられない。

また、他所からの、貴重なタネを欲しいと言う問い合わせや、大学の研究者らからの在来品種の現地保存の大切さを聞いたりしたことが、彼らの価値観を支える一助にもなったという。日本の財産である貴重な在来品種を守る耕作者らの努力や智恵を聞き取り、価値を認め、発信していくことが、生物多様性の維持のため、研究に携わる者にできることであると考えている。

引用文献

Coomes, O. T., and Ban, N. 2004. Cultivated plant species diversity in home gardens of an Amazonian peasant village in Northeastern Peru. *Economic Botany*58 (3): 420-434.